

【文献】

『コンヴィヴィアリティのための道具』イヴァン・イリイチ著、渡辺京二・渡辺梨佐訳

【担当箇所】

III. 多元的な均衡 (p109-185)

1. はじめに-産業主義的發展が人類にもたらしている危機とは？-(p109-114)

➤ 人間のもつ平衡作用・・開放的/限られた範囲で変化することができる

↓対して…

➤ 産業主義システム・・ダイナミックなまでに不安定/無限の拡張と同時的に生じる新しい必要の限度なき創造のために組織される。

- ある社会においていったん産業主義的生産様式が支配的になると、諸価値のいっそうの制度化に限界を課すことは許されない。

- 道具の論理に服従することで満足を求めるべしという矛盾した要請の誕生。

- 人間の生命の平衡作用が抵抗することを抑えるための、人間の操作の誕生。

(例：教育・医療・行政)

→「官僚制は、人々に無意味な仕事をさせるためには社会的に管理する必要があることの表れである。」

(p110)

→「費用が並行して増加していることは、消費社会には不可避免的に二種類の奴隷が、すなわち中毒に囚われた人々と嫉妬に囚われた人々が存在することの反映である。」(p110)



このような背景から・・

限度のない生産が人類の生活を脅かしている様々な局面に、政治の議論を集中させる必要性がある。

↓この議論がないと…

「環境危機という問題も、生産の総産出が減少しないかぎり汚染防止対策は効果を発揮しないことを指摘するのでなければ、上っ面だけのものになってしまう。」(p111)

「そういった対策は老廃物を見えないところに移したり、未来に押しやったり、貧しい人々に押しつけたりということになりがちなのである。」(p111)

➤ 道具の過剰成長

- 脅威を与えるものと受けるものが同一の人間である＝新しい事態（新しい脅威）

- 各人を脅かしている損害そのもの≠新しい事態（新しい脅威）

↓6つのカテゴリーに典型化することによって、与える損害を伝統的な用語で確認できるようにする。

➤ 産業主義的發展が第二の分水嶺を通過したあとに生じた6種の問題

(1)過剰成長が、人間が進化してきた環境の基本的な物質的構造に対する人間の権利を脅かしている。

(2)産業化が自立共生的な仕事をする権利を脅かしている。

(3)人間を新しい環境にあわせて過剰に計画化することが、創造的な想像力を麻痺させてしまう。

(4)生産力の新しい水準が政治参加の権利を脅かしている。

(5)古いものを強制的に廃してしまうことが、言語や神話や道徳や審判における先例の源泉である伝統を生かす権利を脅かしている。

(6)巧みに仕組まれてはいるが強制的な満足の押し付けが生み出した広汎な欲求不満。

※(1)~(5)は、手段を目的に倒置する破壊的な作用をもっている、相互に関連はしているが区別可能なカテゴリー。

(6)は、人々の欲求不満から生まれる脅威。



この6つのカテゴリーが、道具の働きが現在不均衡であることを明らかにする&矯正することを可能にする手続きに関する原則を回復させる

➤ 道具の働きの不均衡を強制することができる手段に関する原則

(1)個人的な不一致を合法的なものとして認めること

(2)現行の手段に対して歴史が弁証上の権威を持つことの承認

(3)政策手段を拘束するのに素人や仲間に頼ることの承認

→「われわれの主要な諸制度の機能を根本的に逆倒することは、ふつう提唱されるような所有や権力の変更よりもはるかに根底的な革命なのである。」(p113)

2. 生物学的退化(p114-119)

➤ 環境のバランスを破壊に陥れるもの・(1)人口過剰(2)豊かさの過剰(3)科学技術の欠陥が原因とされている。

- (1)人口過剰…限られた資源に依存する人の数を増やす

- (2)豊かさの過剰…それぞれの人により多くのエネルギーを使うように強制する

- (3)科学技術の欠陥…非効率的なやり方でエネルギーを劣化させる

➤ ポール・エーリヒの考え・人口抑制と消費の鎮静化。

- イリイチによる評価：産業主義的効率化によって産児抑制を実行したがっている。

➤ バリー・コモナーの考え・科学技術の欠陥が最近の環境の悪化の主要原因。

- イリイチによる評価：道具の基本構造を逆転するよりむしろ、産業を道具面で構成したがっている。

➤ イリイチの考え・3つの傾向だけが重要な脅威とすると、議論すべき点は人口抑制か生産の抑制かの2つだけになる。それだけの一元的な議論で考えてはいけない。

- 環境機器の唯一の解決案は、もし自分らがともに仕事をし、たがいに世話しあうことができれば自分たちは今より幸せになるのだという洞察を人々がわけもつこと。

H松が確認したいこと：

イリイチの上記の考え方は、相互扶助のようなあり方をイメージしているのだろうか？

- 人間と環境の不均衡は相互に協力しあっているいくつかのストレスの一つにすぎない。

↓各ストレスが各々違う次元で生活のバランスを歪める

→「人口過剰は学習のバランスが歪められた結果であり、豊かさへの依存は個性的な価値に対する制度的価値の根元的独占の結果であり、欠陥のある技術は手段が目的へ変質したことの無慈悲な結果なのである。」(p117)

➤ 一元的な議論をすること

- 人間の行為を技術的な完全性として思い描かれた世界が要求するものに適合するように工学的に計画化できるという誤った期待を煽る

- 生産と生殖のシステムを中央で計画化すること=地球の進化の方向性を指導すること、という官僚制の

肯定

➤ 環境に対する技術主義的対応

- 誤った仮説に基づいて進展している。

→「科学技術の歴史的達成は、諸価値を技術的な課題に変えること、つまり諸価値の物質化を可能ならしめた。したがって、急を要するのは、価値を科学技術的過程の一要素として専門用語的に再定義することである…という仮説にもとづいている。」(p118)

H松が確認したいこと：

これは、例えば「水」の水質を測る技術を作れば「綺麗さ」という価値を生み出すことができ、それが環境を守ることに繋がるというようなことだろうか？

➤ 進展する価値の物質化を無力化する社会の能力

- 生態学的均衡の再建の鍵
- その能力がない＝人間が今まで数十万年かかって適応してきた環境を見出すことが不可能。
- その能力をつけること＝人間だけが目的をもち人間だけが目的をめざして仕事をするができるということを再認識すること

H松が確認したいこと：

イリイチのいう生物学的退化とは、今まで人間が環境に適応することで解決してきた問題に対し科学技術に依存する解決法を取ることで放棄する行為という理解でよいのだろうか？

3. **根元的独占(p119-132)**

➤ 根元的独占

- ある銘柄が支配的になることではなく、あるタイプの製品が支配的になること。

例) コカコーラが清涼飲料市場を独占すること…一企業による排他的支配ではない。

喉が渴いたときに水を飲むという選択肢がある。

喉が渴いたときにコカコーラしか飲めないこと…根源的独占状態。

喉の渴きを癒す行為がコカコーラへの欲求に変化。

- 根源的独占がもつ破壊性

例 1) 車…車のために設計された交通網が自転車などの他の手段を締め出し、距離を作り出す。

例 2) 学校…学校で学ぶことを「教育」と定義することで、学校の外の学びに「無教育」の烙印を押す。

例 3) 医療…病弱な人から、医師以外から受けられる看護の機会を奪う。

→人間本来の能力が大型の道具によって排除されるところではどこでも、根元的独占が発生。

→一種特別な社会管理の方法でもある。

例)メキシコの葬儀屋の話…最初は客がいなくて苦戦(埋葬方法を人々が知っていたため)

しかし、共同墓地の管理権を獲得して以降は葬儀の儀式執行を担うように。

葬儀屋に儀式執行をゆだねることを義務付ける法の登場＝根元的独占へ

➤ 人が生まれながらにして持つ能力

- 人々は生まれながらに治療する・慰める・移動する・学ぶ・家を建てる・死者を葬るなどの能力を持つ
→各々がそれぞれの必要を満たすようにできている。

↓

- 商品に最低限頼り、自分でできることに頼るかぎり、必要を満たす手段は有り余るほどある。
→交換価値ではなく、使用価値をもつ。

- 人が生まれながらにして持つ能力を放棄した場合
 - 人々の個人的な行為が、「サービス」という商品に。
 - 「大規模な道具が人々の代わりにしてくれる何か「よりよい」ことと引き換えに、人々が自分の力とおたがいの力でできることを行う生まれつきの能力を放棄するとき、根元的独占が成立する。**根元的独占は、価値の産業主義的制度化の反映である。**」(p126)
 - サービスの希少性によって特権をつくり、人々をサービスに依存的にしていく。
 - ↓ゆえに…
 - 専門家による根元的独占からの保護を人々が認識する必要性がある。
 - ↓どのように認識していけばよいのか？
- イリイチの考え
 - (1)消費の強制によって脅威をうけていると感じる人が保護を要求できるような手続きを取れるようにすること
 - しかし、これは困難。人々は自分の利害を脅かす危険には立ち向かって、社会全体を脅かす危険について立ち向かわないだろうから。
 - (2)根元的独占を維持するための費用を払い続けるより、独占を終わらせるための費用を負担した方がマシと大衆が悟ること
 - しかし、これも今は困難。^{コンヴィヴィアリティ}自立共生をたえがたい貧しさと混同する人は自発的に対価を支払わない。



しかも…。

- 人々が感じる欲求不満に対する姑息な緩和策の存在
 - (1)消費者の保護…消費者が自信を守るためによりよい技術を求め、いっそう依存度を高めてしまう。
 - (2)計画化…政治の論点が、より多量のよりよい品物を提供せよという要求に落ちてしまう。



なにが、人々を脅威から盲目にしているのか？

「この盲目性は第三のバランス、つまり学ぶことのバランスが傾いたためであり、人々が味わっている不能感、私がかのバランスと呼ぶものにおけるさらに四番めの転覆の結果だと私は信じている。」(p132)

4. 計画化の過剰(p132-152)

- 2種類の「学ぶこと」・(1)環境に対する人間の創造的な働きかけの成果
 - 人々の基本的な相互の関わり合いと自立共生的な道具の使用に由来。
 - 「学習」
 - (2)人工的につくりあげられた環境による人間の“些末化”の結果
 - 目的をもち計画化された訓練に従うことの結果に由来。
 - 「教育」
- 独学で学べる範囲
 - 道具の構造に依存。道具が自立共生的でなければならないほど、教える行為が助長される。
- 道具の専門分化と労働の分業
 - 相互に強化されうる。集中と専門化は一定の点をこえると、高度に計画化された操作者と依存者を必要とするようになる。

- 学習のバランス・・・(1)完全な学習＝数が増えていく技能と機会を自分のものにして自発的な学習の範囲が広がり、自由と訓練とが花開くときに進展する。
- (2)依存的な学習（教育）＝自分自身のやり方をすれば不安になり、自分のすることから学ばなくなってしまったときに、「教育」が必要と思うようになっていく。
学ぶことが商品となる。
- ↓学習が教育に変質したことで・・・
- 人間の詩的能力（世界に個人の意味を与える能力）が麻痺する。
- 学習のバランスの墮落は人々を道具の操り人形にしてしまう。
- 学習のバランスの回復方法・・・政治的行動から、教会と政府および強制的知識を切り離す。
- 高度に資本化された道具・・・高度に資本化された人間を必要とする。
 - 人々は、自分が学級で多くの時間を費やすほど、自分の市場価値が高まるということを教わる。
 - 人々は、毎日の授業を統括している官僚の気に入るように統制ある競争をすることを学ぶ。
→教室にいるときは「先生」・仕事場では「ボス」と呼ばれる。
 - 人々は、自分の地位と職業を、卒業した学校のレベルと学問上の専門分野とあわせて受け入れるように習慣づけられる。
→産業主義的な職は、良い学校を出たものがより希少な地位につくように配置されている。
→学校教育を受けることが少ないものは、より好ましい商品に近づくことを阻まれる。
→人々は、教育によって消費の資格をもつようにされていく。
 - 人々は、使用価値を生み出す力を自分自身の時間に付与する能力を奪われ、賃金のために働き、自分の稼ぎを産業的に限定されたものと交換するように強いられる。



教育が人々を職に対して等級付け、市場から自立共生的な商品が駆逐されていく。

- 学校・・・第二の分水嶺を超えたもの。自立共生的な性質を持つ道具を、一方的な訓育に奉仕するものにしてしまうもの。
- 図書館・・・学校化された世界の構成要素の一つに成り代わっている。
例) 平日 10 時から 18 時までしか開館しない図書館
仕事にも学校にも行かずに研究補助金で暮らしている読者の特殊化された道具となっている。



→「学びたいと欲するならば何が人々に必要なのかという問を發し、それから人々のためにそういう道具を供給するようにしなければならない。」(p148)

→「人々は限度内で暮らすことを学ばねばならない。このことは教えてもらうわけにはいかない。生き残れるかどうかは、人々が自分たちには何ができないのかということを速やかに学ぶことにかかっている。」(p149)

- 自発的で効果的な人口抑制
 - 根元的独占と過剰な計画化のものでは不可能。
→構造づけられた世界に生きながら、喜びにみちた禁欲を教え込むのは不可能だから。

- 産児制限に必要な工夫・現代の自立共生的な道具にとっての範例。自立共生的なやり方でのみ遂行できるもの。
- 合理的で脱産業的な道具が手に入るようになること・専門職的なタブーと産業主義的な道具は歩みをとめる。

5. 分極化(p153-164)

➤ 今日の道具の構成

- 人口と豊かさの水準の両面における成長を駆り立てる

↓

- 特権をもたぬもの…数の面で成長/欲求不満を高めるだけの要求を強める（急激な産業化を要求）
- 既得特権のもちぬし…豊かさの面で成長/自分の権利や必要物を防衛（狂気じみた生産を行う）

↓その結果…

- 権力が分極化・欲求不満が一般化

↓その結果…

より低い豊かさにもとづいてより幸せになる道を選ぶという選択肢は盲点に追いやられる

➤ 盲目性を生むもの

- 学びのバランスが崩れ、教育に縛り付けられることであらゆるものの「購入者」として条件づけられてしまうこと。

➤ 今日の道具の力能

- 道具が少数のエリートの思うままになるように統合されている
- 大多数が高価な特権のひとそろえを要求しないよう、多種多様な装置に頼る
→その人の教育消費を値段札で示すこと。
→知識資本が大きければ大きいほど、その人が下す決定の価値は大きく、レベルの高いひとそろえを要求する権利も正当になる。



学歴という格差が誕生

➤ 学歴がないこと

- たいていの人を低い地位に押しとどめる
- 社会的に抜きんでた職務につくこと＝もっとも切望され、競い合われる産物
- 欲求不満を引き起こす

➤ 低消費者と半失業者

- 産業主義的進歩の副産物
- 平等な賃金より、平等な仕事/産出の平等より、投入の平等 を求めれば、社会の再構成の要になれる。

➤ 家事労働

- 産業化になじまない日常の仕事をする女性たちがいることで、産業主義的社会が存続できている
→=家事労働（非人間的で価値の低いものにされてしまっている仕事）
- 家事労働がなければ、産業主義的社会が存続できないと示せば、産業の拡大は抑制可能。

H松が確認したいこと：

学びのあり方だけではなく、労働とは何かを捉えなおすことによって、道具との関係性を見直そうということか。

6. 廃用化(p164-171)

- 廃用化
 - 価値の切り下げを生み出す
 - 根元的独占を行使するような生産物に生じる変化の結果
 - 人々が市場から直接締め出されていない場合でもたえがたいものになりうる
 - ↓なぜか？
- 市場を開拓する効果的な方法
 - 新しいものを使うことが重要な特権という考えを確立すること
- 新型製品がへの信仰がもたらすもの
 - たえずよみがえる貧しさ
 - 「よりよいもの」が「現によりよいもの」に取って替わる
- 今の科学のあり方
 - より多くの力能と効率を求める要求によって設定されている
 - 学校が作り出した科学道具に近づく権利の制限を撤廃すること＝探求心に富むものの研究を可能に
- 無制限な速度の変化
 - 法に支えられた共同社会を無意味化
 - ふつうに起こり、また起こりそうな状況に関する社会成員の回顧的判断にもとづいている。
 - 状況の判断ができない速度で変化が起こること＝判断の妥当性を失うこと
 - 社会の管理が専門家にゆだねられる
 - 教育者が人はどのように訓練されるべきかを定め、産業の要求にかなう人間を作る
 - 社会環境に合わせて人間を道具化することが主要な産業になってしまう

7. 欲求不満(p171-185)

- 現在の研究
 - よりよい商品のよりよい生産の進展をめざす研究や開発
 - よりいっそう消費を行うように人を保護することに関する一般的システム分析
 - ↓対して、これからの研究は…。逆の方向に向かうべき。
- 管理に立ち向かう研究
 - 課題1:道具の殺人的な論理を初期段階で見破るための指針を提供すること
 - 課題2:生活のバランスを最適なものにし、人びとのための自由を最大にする道具と道具体系を案出すること

→私たちが必要としているのは、他者の同様な願望を挫くことなしに自らの願望を果たすために、具体的な地域社会がその範囲なら科学技術を用いてよろしいという諸次元を、理性的に探究することである。(p175)

そのために…。

- 目的のバランス
 - 望ましい道具を選ぶためのさらに進んだ基準を提供するもの。
 - 道具…(1)最適な範囲(2)たえられる範囲(3)マイナスに働く範囲がある
 - 手段と目的のバランスの感覚を脅かす
 - 人々の欲求不満を招く
- 目的のバランスが依存する価値
 - これまでの5つの基準とは異なる価値に依存している。

- 限界を憲法の上で制限する基準…経験的なものではなく、概念的なもの。

例) 高速輸送に浪費された時間とひきかえに得られる価値についての判断…地域社会での合意に左右

➤ 管理に立ち向かう研究がなすべきこと

- (1)増大する限界非効用と成長が与える脅威の分析と、自立共生的な生産を最大限に活用する制度的構造の一般システムの発見
→しかし、欲求不満が深まっていくのに気が付かない人からの心理的抵抗にあう可能性
→それでも、人間は生まれながらに移動でき、足を使って達しうる測度よりも速い速度は社会にとって貴重なものであり、公衆の犠牲的な支えを正当化することが明らかにされる必要がある。
- (2)人々の道具に対する関係を明らかにし、劇的に叙述するものになること
- (3)いかなる集団・同盟の暗黙の利害と一致することを明らかにすることで公衆全体を包摂すること
→成長への偏執からの脱却は苦痛。しかし、その苦痛は、消費によってもっとも無能化されている人々にとっての苦痛。

H松が確認したいこと：

消費によってもっとも無能化されている人たち（つまり、今の産業主義的社会で恵まれた立場にある人たち）が自分自身の欲求不満を我慢することが必要ということなのだろうか？

<この章を読んでH松が考えたこと（感想）>

・イリイチはこの章で、自分が自分で、できること・できないことを把握し、「よりよいもの」への欲求をどのように我慢をしていけるのかということ論じているが、その我慢は学校で教育をされること（自発的に貧しさを選ぶように教育されること）では学べないという指摘をみて、イリイチは学びというものに重きをおいていたのだなと思った。

<みなさんと一緒に議論を深めたいこと>

(1)イリイチは、学校だけでなく、ものを学ぶことを商品にしたものを批判している。もし、イリイチが今も生きていて、まなキキのページを見てくれたとしたら、「これはまさに、私が考えていた自立共生的な学びだ！」と言ってくれるだろうか？

(2)イリイチは、人間が元々持っている能力がかなり大きいことを前提にして、その能力を信頼し、科学のあり方を考えているように思えた。ただ、人それぞれの能力の差についてはどのように考えていたのだろうか？